

## 第 50 回全国美術高等学校協議会 記念講演レポート

- 日程：2019 年 11 月 22 日（金）
- 場所：横浜美術館
- 対象：全国美術高等学校協議会 会員
- 参加人数：57 名
- レポート担当者：中野 真理（神奈川県立白山高等学校 校長）

コップの水に氷を一つか二つ入れてください。氷は水に浮かびます。それは私たちにとって、当たり前のことです。ですが、このことは化学を学んだ私たち理科教師にとっては、とても不思議で、水という特別な物質の魅力的なところなのです。なぜなら、物質は、固体・液体・気体の 3 つの状態に変化し、通常は固体の状態が一番重く、液体、気体と状態が変わるにつれて軽くなります。したがって、重い固体は液体に沈む。つまり、氷は水に沈むはずなのです。しかし、氷は水に浮く。不思議だと思いませんか？水は、酸素の原子を真ん中にして、左右に水素の原子が結合している分子です。そして、水素－酸素－水素は  $109.5^\circ$  の角度で繋がっている。この分子の形が、氷が水に浮く原因を作りだしています。そして、私たち理科教員には、コップの水に氷が浮いているそれを見ただけで、 $109.5^\circ\text{C}$  の角度で水素と酸素が繋がっている水分子一つひとつが見えるのです。

さて、本題。福先生はご講演の中で、フィンセント・ファン・ゴッホの「靴」を私たちに見せて、この絵について問われました。理科教師の私にとっては初めての絵でしたので、単純に「向かって左側の靴だけ、くるぶしから上の部分が折り返されている。この靴の持ち主は兵士、いや労働者か…。」そんなことを思い浮かべました。その後、福先生がこの絵に関する意見をご紹介くださったのを聴くうちに、より注意深く見つめている私自身に気づきました。そして、新たに「二つともが左足の靴に見える。なぜ左足の靴が並んでいるのだろう。靴の持ち主は靴を脱いでどこに行ったのか？随分疲れているだろうに。この靴が再び履かれることがあるのだろうか。作者はなぜこの靴を描いたのだろう？…」と、次から次へと色々な考えが浮び、福先生がご紹介くださった他者の意見と比べ、自分自身と対話していました。

京都造形芸術大学で ACOP／エイコップ（Art Communication Project、「みる・考える・話す・聴く」の 4 つを基本とした対話型鑑賞プログラム）を経験した学生さんの中には、美術館で一枚の絵を 1 時間以上、ご覧になっている方もいらっしゃるそうです。福先生のご講演を拝聴した私は、「なんと羨ましいこと！そういう見方／コミュニケーションを私も体験してみたい」と思うようになりました。

物質を構成している原子や分子が見えるようになるには、化学という特別な学習が必要です。しかし、目の前にあるものを注意深く見る、気づくという過程は、自然科学にも「アート」の鑑賞にも共通する活動です。「アート」には、美術史の特別な知識を持たない私をも引きつけ、感じ、考えさせる力があります。そして、感じたこと、考えたことを鑑賞者同士のコミュニケーションを通じて共有・共感したり、意見をぶつけ合ったりしながら読み解いていくことができる。すると、鑑賞者の理解や興味・関心は猛烈に高まっていきます。現に私は、福先生の問いに答えようとしたことで、ゴッホの「靴」だということを調べたのですから。

今、理科教師でありながら美術科高校の校長として、ACOP を本校の美術科と普通科のカリキュラムに共通して組み込むことができないかと真剣に考えています。そして、生徒に、見えなかったものが見えるようになる喜びを味わわせたい。更に、自分の目で見て、それを語る、他者の意見を聴くという活動を通して、「生きる力」に加えて、自己肯定感をも育むことができるのではないかと、とてもワクワクしています。